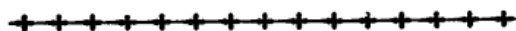


大新 正修 大藏經索引



第四十三冊
續 諸 宗 部
三下



新文豐出版公司 影印

大正修 大藏經索引 第43冊 續諸宗部三下

中華民國81年4月台1版

精1冊基價15.7元

編集者：大藏經學術用語研究會

發行者：高 本 釗

發行及印刷所：新文豐出版公司

公 司：臺 北 市 雙 園 街 9 6 號

電 話：3 0 6 0 7 5 7 · 3 0 8 8 6 2 4

門市部：臺北市羅斯福路一段20號8樓

電 話：3 4 1 5 2 9 3 · 3 4 1 5 2 9 4

台 北 郵 政 3 6 4 3 信 箱

登記證：局版臺業字第0649號

郵政劃撥：0 1 0 0 4 4 2 6 號

ISBN 957-17-0447-4 (套)

ISBN 957-17-0459-8 (第四十三冊：精裝)

出版說明

本「大正藏續編索引」第三二至四八冊係根據大正新修大藏經續編第五六至八五冊所作諸內容索引，這是日本大藏經學術研究會邀請六所佛教大學——立正、大谷、大正、龍谷、駒澤、高野山等負責編撰本索引，深獲各界好評，特此推介學林，以公諸讀者。

凡其五五冊正編部份所作三一冊索引，業於民國六十九年景印刊行，屢經讀者多方詢問：何時得以全部出齊，以利學者應用；經數年來考核評量，並得鄰國日本諒解，為使此國際性工具書，俾以完整面目提供學者使用，特此全數景印，有了這部索引，任何問題都可以迎刃而解，可知此部索引存在價值是何等珍貴，謹此說明。

本公司編輯部 謹啟壬申年元月

簡介研讀大藏經的工具書

楊白衣

～法寶總目錄與大藏經索引之功用～

研讀大藏經是每一位佛子嚮往的終身大事，不研究則已，若想研究，則非賴特殊工具書莫辦。過去研究佛學，一、靠辭典，二、靠年表，三、靠經書目錄，但這些工具書已無法收到事半功倍之效，勢必另覓他途解決。

日本學者對此提供了最有力的工具書二種，其嘉惠學界之深，誠令吾人嘆為觀止！此二種工具書，一曰『法寶總目錄』，一曰『大藏經索引』。案此二部書之主要功用如下：

一、法寶總目錄之功用可查下列事項：

- (一)知著者而不知其著作。
- (二)知經書而不知著者、譯者。
- (三)知經書而不知有無異譯本。
- (四)知經書而不知何代、何年、何人之著譯。
- (五)知經書而不知內容章節。
- (六)知經書而不知在何處（第幾冊、幾頁）
- (七)知經書而不知有無前人之註解。
- (八)查著譯者之籍貫、俗姓、生卒年。
- (九)查經書之原名、漢譯名、日譯名。
- (十)查經書在各種版本之歸屬。

二、大藏經索引之功用有下列事項：

- (一)查法相、名數之所在以及定義等。
- (二)查人名、地名等所有固有名詞之原名，出現次數以及同名異人。
- (三)查某一術語在某一部經書中之用例、定義、異名及在各宗派中之觀點。
- (四)查五十種分類項目（詳如下表）之所在以及佛教的人生觀、宇宙觀。
- (五)查典籍之解題以及在國際上現今的研究成果。
- (六)查每冊藏經之詳細內容以及佛教之觀點。

『法寶總目錄』共三巨冊，除檢查上述各種要目之外兼有經錄的性質，不但收錄了各版本藏經，如『明藏』、『訃藏』、『訃續藏』等目錄，以及名庫所藏之書目，且有智旭大師的『閱藏知津』與陳實的『大藏一覽集』，可查每一部經律論（一七七三部）之解題、音義、傳記、疏鈔、目錄、纂集、護教、序讀、詩歌等，極為方便。

『大藏經索引』是根據日本『大正新修大藏經』（中華文化會館及新文豐出版公司影印之大藏經）前五十五冊所作之內容索引，這是日本大藏經學術研究會邀請六所佛教大學負責編撰的索引。其索引之計劃工作本以名學者小野玄妙博士（佛書解說大辭典作者）為中心，從民國三十二年開始著手，並已刊行了阿含部、目錄部、法華部各乙冊。這個計劃後來由於博士之逝世和第二次世界大戰之影響而不得不告中斷。直到民國四十五年由大谷大學、高野山大學、駒澤大學、大正大學、立正大學、龍谷大學等六所佛教大學重新提議，計劃把『大正新修大藏經』中之印度、中國、日本等三國選述之部分共計八十五冊之內容作成索引四十八冊以利學者應用。這六所佛教大學合議之結果，組成大藏經學術用語研究會，對內容的分類項目先行檢討後，決定以下列的原則展開工作。

一、以小野玄妙博士之計劃為藍本，分為分類項目別索引、音次索引、字劃索引、四角號碼索引、梵語索引、使其成為國際性之工具書。

二、用語之選擇，以漢譯大藏經為準，以總合研究之方法，每頁選出五十個學術用語，而把它配於五十種分類項目。五十種分類項目，以印度撰述部分為中心，而每項目之下再細分若干細目，其詳目如下：

1. 教 說：經典分類名目（三藏、九分教、十二分教等）……a通說 b三藏 c九分教 d十二分教
2. 教 判：有關大乘小乘，一乘三乘，密宗及各宗判教之用語……a通說 b大小乘 c一三乘 d各說
3. 教 理：表示教理之用語如三法印、空、中、緣起、佛性、如來藏等……a通說 b各說
4. 法 相：有關構成宇宙萬象的現象與本體之用語，與五位諸法有關連的名稱……a通說 b色法 c心法 d非色非心法
5. 惑 業：有關說明輪迴的惑障，業道之用語（除緣起、因果）……a通說 b惑 c業 d苦
6. 行 位：表示修行道位及得果的有關斷惑證理之用語……a通說 b凡夫位 c聲聞緣覺位 d菩薩位

- 7.戒律：有關戒律之種類、細目、持犯等之用語……a通說 b各說
- 8.禪觀：有關一般禪定、三昧、觀法之用語……a通說 b禪定 c觀法
- 9.世界：有關三界、六道等之用語……a通說（包括三界六道，二十五有）b天 c大 d地獄 e餓鬼 f畜生 g阿修羅 h其他
- 10.佛：有關佛的德性、身土、佛名、諸尊之用語……a通說 b德性 c佛身 d佛土 e佛名 f諸尊
- 11.人名：按照身分分類之固有名詞……a比丘比丘尼 b優婆塞優婆夷 c仙人 d外道 e菩薩 f其他
- 12.教派：有關學派、宗派之用語……a學派 b宗派
- 13.教團：有關僧伽、教團之法規及僧階之用語……a通說 b法規 c僧階 d其他
- 14.寺院：有關寺院之用語……a通說 b各說
- 15.信仰：有關各種信仰之用語……a通說 b各種信仰（包括稱名唱題等）
- 16.儀禮：有關佛事及僧衆等一般儀式、作法之用語……a通說 b佛事 c作法 d僧衆行儀
- 17.事相：有關密宗四度加行、灌頂行法之用語……a通說 b行法 c四度加行 d護摩 e灌頂 f其他
- 18.曼荼羅：有關密宗行法修行之本尊曼荼羅之用語……a通說 b各說
- 19.印契：有關密宗於行法時結印契（手印）之用語……a通說 b各說
- 20.陀羅尼：有關陀羅尼之用語……a通說 b真言（純密） c其他
- 21.外教：有關婆羅門教，印度諸學派、儒教、道教、神道之用語……a通說 b婆羅門 c印度諸學派 d儒教 e道教 f神道 g其他
- 22.咒術：有關幻化、咒術之用語……a通說 b幻化 c咒術
- 23.天文曆數：有關天文、時節、方位、算數、度量衡之用語……a通說 b日月星宿 c氣象 d時分 e歲月 f宿曜曆及吉凶日 g方位 h算數 i度量衡
- 24.地理：有關地理、地名之用語……a通說 b地名 c山名 d水名 e園林名
- 25.動物：有關動物之用語……a通說 b各說
- 26.植物：有關植物之用語……a通說 b各說
- 27.礦物：有關礦物之用語……a通說 b各說
- 28.物理：認為與物理，化學有關之用語……a通說 b色 c形狀 d聲音 e光熱
- 29.論理：有關因明，論理學之用語……a因明 b論理。

- 30.心理：認為與心理學有關之用語
- 31.倫理：有關倫理、道德之用語（例如恩義等）
- 32.教育：有關教育之用語。
- 33.生理衛生：有關生理與衛生之用語……a通說 b身體 c出生 d生理 e衛生
- 34.醫術藥學：有關醫術、藥學之用語……a通說 b療法 c病名 d藥
- 35.民族：有關民族、種族之用語……a民族 b種族 c其他
- 36.社會：有關家族、身分、階級等之用語……a通說 b家族 c身分 d階級 e其他
- 37.政治經濟：有關政治、法制、軍事、經濟之用語……a通說 b行政 c法律 d財政 e軍事
- 38.產業：有關一般職業之用語……a通說 b職業
- 39.風習：有關飲食、衣服、風俗之用語……a通說 b食物 c調味料 d飲料 e衣服 f裁縫 g風俗 h娛樂
- 40.言語：有關語言之種類、文字、文法、翻譯之用語以及梵語，巴利語等之音譯名詞……a通說 b種類 c文字 d文法 e翻譯 f音譯名詞 g其他
- 41.名數：以數目合成之用語
- 42.典籍：有關一般典籍之用語（包括品名）
- 43.紀年：有關年號、干支、王朝等之用語
- 44.文藝：譬喻、因緣、詩頌等與文藝有關之用語……a通說 b本生 c因緣 d譬喻 e文疏 f詩偈
- 45.音樂：有關音樂之用語……a通說 b音聲律呂 c調子 d聲譜 e典目 f樂器。
- 46.建築：有關建築之用語……a通說 b種類 c規構 d技法 e堂舍
- 47.圖像：有關佛、菩薩等的繪畫、彫刻之用語……a通說 b繪畫 c彫刻
- 48.工藝：有關美術工藝之用語……a通說 b題目 c形像 d素材 e技巧
- 49.器物：有關器具、佛具之用語……a通說 b佛具 c器具
- 50.雜語：不屬於上述四十九項目之詞彙

六家大學的分擔情形，到目前為止已出版者如下：

甲、印度撰述部

索引第一冊	阿含部	駒澤大學	大正藏第一、二冊
索引第二冊	本緣部	高野山大學	大正藏第三、四冊
索引第三冊	般若部	大正大學	大正藏第五～八冊

索引第四册	法華涅槃部	龍谷大學	大正藏第九、第一二册
索引第五册	華嚴部	龍谷大學	大正藏第九、一〇册
索引第六册	寶積部	大谷大學	大正藏第一一、一二册
索引第七册	大集部	龍谷大學	大正藏第一三册
索引第八册	經集部(上)	駒澤大學	大正藏第一四、一五册
索引第九册	經集部(下)	大谷大學	大正藏第一六、一七册
索引第一〇册	密教部(上)	高野山大學	大正藏第一八、一九册
索引第一一册	密教部(下)	大正大學	大正藏第二〇、二一册
索引第一二册	律部(上下)	駒澤大學	大正藏第二二~二四册
索引第一三册	釋經論部中觀部	駒澤大學	大正藏第二五、二六、三〇册
索引第一四册	毘曇部(上)	立正大學	大正藏第二六~二八册
索引第一五册	毘曇部(中)	龍谷大學	大正藏第二六~二八册
索引第一六册	毘曇部(下)	大谷大學	大正藏第二九册
索引第一七册	瑜伽部(上下)	立正大學	大正藏第三〇、三一册
索引第一八册	論集部	龍谷大學	大正藏第三二册

乙、中國選述部

索引第一九册	經疏部(一)	大正大學	大正藏第三三、三四册
索引第二〇册	經疏部(二)	大谷大學	大正藏第三五、三六册
索引第二一册	經疏部(三)	龍谷大學	大正藏第三七、三八册
索引第二二册	經疏部(四)	高野山大學	大正藏第三八、三九册
索引第二三册	律疏部論疏部(一)	龍谷大學	大正藏第四〇、四一册
索引第二四册	論疏部(二)	大谷大學	大正藏第四二~四四册
索引第二五册	諸宗部(一)	立正大學	大正藏第四四、四五册
索引第二六册	諸宗部(二)	大正大學	大正藏第四六、四七册
索引第二七册	諸宗部(三)	駒澤大學	大正藏第四七、四八册
索引第二八册	史傳部(上)	大谷大學	大正藏第四九、五〇册
索引第二九册	史傳部(下)	龍谷大學	大正藏第五一、五二册
索引第三〇册	事彙部外教部	高野山大學	大正藏第五三、五四册
索引第三一册	目錄部	立正大學	大正藏第五五册

丙、日本撰述部

索引第三二冊	續經疏部(一)	立正大學	大正藏第五六、五七冊
索引第三三冊	續經疏部(二上)	高野山大學	大正藏第五八、五九冊
索引第三四冊	續經疏部(二下)	高野山大學	大正藏第六〇、六一冊
索引第三五冊	續律疏部	駒澤大學	大正藏第六二冊
索引第三六冊	續論疏部(一)	大谷大學	大正藏第六三~六五冊
索引第三七冊	續論疏部(二上)	龍谷大學	大正藏第六五、六六冊
索引第三八冊	續論疏部(二下)	龍谷大學	大正藏第六六~六八冊
索引第三九冊	續論疏部(三)	龍谷大學	大正藏第六八~七〇冊
索引第四〇冊	續諸宗部(一)	立正大學	大正藏第七〇、七一冊
索引第四一冊	續諸宗部(二)	大谷大學	大正藏第七二~七四冊
索引第四二冊	續諸宗部(三上)	大正大學	大正藏第七四~七七冊
索引第四三冊	續諸宗部(三下)	高野山大學	大正藏第七七冊
索引第四四冊	續諸宗部(四)	高野山大學	大正藏第七八、七九冊
索引第四五冊	續諸宗部(五)	駒澤大學	大正藏第八〇~八二冊
索引第四六冊	續諸宗部(六)	大谷大學	大正藏第八三、八四冊
索引第四七冊	悉曇部	大正大學	大正藏第八四、八五冊
索引第四八冊	古逸部、疑似部	駒澤大學	大正藏第八五冊

本索引之最大特色為站在最新的研究成果，以梵文、巴利文等音譯，固有名詞為中心，盡量地附註羅馬字拼音的原文。

『大藏經索引』用途之大，吾人得由五十種分類項目窺見一斑，於此不但可見佛法大海之廣闊無邊，且能證明佛法之多面性格，其內容有人文科學、社會科學、自然科學，應有盡有。以前吾人研究佛學總有望洋興嘆，不知所措之感，現在有了這部索引，任何問題都可迎刃而解，吾人可隨意查閱自己所欲了解之事項。於此不但可查出該用語在大藏經中的所在（頁數），亦可比照各宗派對該問題之看法。不像已往想查尋一個問題往往得花費許多時間，仍無法解決問題，至於想比較研究那就更困難了。例如：有關「業」與「輪迴」之問題來說，可將原始佛教、部派佛教、大乘佛教中較代表性之經論，如：阿含經、俱舍論、成業論、中觀論等之有關「業」與「輪迴」之記載，依索引的指示抄錄出來，然後加以研究原義以及發展的過程。這豈不是輕而易舉之事。在未有索引以前吾人必須讀破整部經典，方能洞悉該問題之所在，而且仍無法收集完整的資料。

又例如吾人想知道佛教對生理衛生的看法，對國家、社會的看法，則可隨便找一本索

引，查閱有關這些問題之所在，然後找某一部經論研讀。這在以前是做夢也想不到的事，由此可知這部索引之存在價值是何等地珍貴了。

總之，研究佛學『法寶總目錄』與『大藏經索引』為學者不可缺的重要工具書。

收 錄 典 籍 解 題

本書は、大正新脩大藏經第七十七卷（續諸宗部八）所收の眞言宗に屬するものあるいは關する典籍の索引である。第七十七卷所收の眞言宗に關する諸典籍は次の第七十八卷，第七十九卷と不可分である。第七十七卷には，空海撰の論をはじめ眞言教理に關する解釋類が四十二部收められている。No. 2425 から No. 2460 までで具體的には次の通りである。

典籍番號	典 籍 名	撰者名			
			No. 2439	阿字要略觀（一卷）	實 範 撰
			No. 2440	大經要義抄注解（一卷）	
No. 2425	祕密漫荼羅十住心論（十卷）		No. 2441	祕宗教相鈔（十卷）	重 譽 撰
		空 海 撰	No. 2442	十住心論鈔（三卷）	重 譽 撰
No. 2426	祕藏寶鑰（三卷）	空 海 撰	No. 2443	十住心論打聞集（一卷）	
No. 2427	辯顯密二教論（二卷）	空 海 撰	No. 2444	十住遮難抄（一卷）	
No. 2428	即身成佛義（一卷）	空 海 撰	No. 2445	眞言教主問答抄（一卷）	經 尋 撰
	眞言宗即身成佛義問答（一卷・異本一）		No. 2446	千幅輪相顯密集（一卷）	興 然 撰
	即身成佛義（一卷・異本二）		No. 2447	貞應抄（三卷）	道 範 撰
	眞言宗即身成佛義（一卷・異本三）		No. 2448	諸法分別抄（一卷）	賴 實 記
	即身成佛義（一卷・異本四）		No. 2449	眞言名目（一卷）	賴 實 述
	即身成佛義（一卷・異本五）		No. 2450	開心抄（三卷）	杲 實 撰
	眞言宗即身成佛義問答（一卷・異本六）		No. 2451	金剛頂宗綱概（一卷）	杲 實 撰
No. 2429	聲字實相義（一卷）	空 海 撰	No. 2452	大日經教主本地加持分別（一卷）	
No. 2430	吽字義（一卷）	空 海 撰			杲 實 撰
No. 2431	御遺告（一卷）	空 海 撰	No. 2453	寶冊鈔（十卷）	杲 實 記 賢 實 補
No. 2432	阿字觀用心口決（一卷）	實 慧 撰	No. 2454	十住心義林（二卷）	宥 快 撰
No. 2433	眞言付法纂要抄（一卷）	成 尊 撰	No. 2455	大日經主異義事（一卷）	宥 快 記
No. 2434	辯顯密二教論懸鏡抄（六卷）		No. 2456	寶鏡鈔（一卷）	宥 快 記
		濟 暹 撰	No. 2457	大日經教主義（一卷）	曇 寂 撰
No. 2435	顯密差別問答（二卷）	濟 暹 撰	No. 2458	眞言宗未決文（一卷）	德 一 撰
No. 2436	四種法身義（一卷）	濟 暹 撰	No. 2459	未決答決（一卷）	房 覺 記
No. 2437	住心決疑抄（一卷）	信 證 撰	No. 2460	德一未決答釋（一卷）	杲 實 撰
No. 2438	阿字義（三卷）	實 範 撰			

No. 2425 祕密漫荼羅十住心論（十卷）と No. 2426 祕藏寶鑰（三卷）の二書は，ともに十住

心の思想について述べたものであるが、前者は引證文を多く含む特色を有し、後者は十住心思想の綱要書性格を持っている。したがって、前者を廣論、後者を略論とも呼ぶ。

兩書の撰述年代は明らかでないが、十住心論は、天長年間に勅命で撰述されたいわゆる天長六本宗書のひとつと考えられるところから、まず十住心論が撰述され、その後間もなく、その綱要書として秘藏寶鑰が撰述されたと推定されている。したがって、兩書は、天長六本宗書の成立時と推定される天長7年(830)すなわち空海57歳の時に撰述されたものとみることができよう。

空海の十住心の思想は、大日經住心品の思想に基づきながら、これに菩提心論や釋摩訶衍論の思想を取り入れて、人間の心のすがたや、その発展の次第を十段階に位置づけたものであり、これを心品轉昇の次第、あるいは菩提心展開の次第を示したものとみることができる。しかし他方では、十住心のうち、はじめの三住心は世間の心(世間三箇の住心)を示したものであるとし、また第四・五住心は小乗(聲聞・緣覺)の住心であり、さらに第六・七・八・九住心は、大乘のうち順次に法相・三論・天台・華嚴の各宗の住心であるとして、これらは顯教であつて、これに對して第十住心は眞言密教の住心であり、最高の心であるとして究極の心に位置づけられる。眞言教學では、このうち、前者の心品轉昇の次第としての十住心を心續生の十住心あるいは九顯十密の十住心として十住心の正意(第一義)とし、後者の十住心を教判的立場を示す十住心として顯密合論の十住心あるいは九顯一密の十住心として十住心の兼意(第二義)とする。そうして、この二つの立場ともに兩書に示されているとするが、その文章の上からは、十住心論は九顯十密の思想を中心とし、秘藏寶鑰は九顯一密の思想を中心として説かれているとする。

つぎに兩書の内容上の相違点を抽出してみると、

(一)十住心論(以下廣論と呼ぶ)では各住心の説段が淺略・深秘の二釋の説段からなつていますが、寶鑰(以下略論と呼ぶ)では第九住心にのみこの二釋が説かれる。(二)廣論には194を数える多くの引用文が引かれ、特に良賁の凡聖界地章は、第1巻から第6巻にわたつてほとんどその全文が引用されるが、略論ではこれらの引用文はほとんど省略され、新しい引用文を加えての總数は48となつてゐる。(三)略論のはじめと終りの部分及び第六・七・八・九の各住心のはじめの部分の文は、廣論の文と全く同じである。(四)略論の第十住心の説段の大部分は、廣論には引かれていない菩提心論三摩地段全段の引用文である。(五)略論の第六・七・八・九住心の終りの部分には、廣論には引かれていない釋摩訶衍論の五重問答の引用がある。(六)略論の第四住心の説段には、廣論にはない佛教と國家・社會との關係を論ずる十四問答が掲げられている。等が挙げられる。

總じていえば、十住心論は、長文の引用文によつて十住心思想の背景思想を明らかにしようとしているが、十住心の思想を集約的に述べていないきらいがあり、これに對して寶鑰は、十

住心の思想を明快に説き示している綱要書的面にその特色がある。

No. 2427 辯顯密二教論（二卷）は、空海が新たに提唱した眞言密教の勝義を、從來の佛教（顯教）に對比して論證したものである。これを横の教判と稱して、前の十住心體系に基づいた豎の教判と視点を異にする。この論證のための經論は、五祕密儀軌、瑜祇經、聖位經、大日經、楞伽經、金剛頂教王經、菩提心論、大智度論、釋摩訶衍論の六經三論を中心に、華嚴五教章、摩訶止觀、大乘法苑義林章、般若燈論、六波羅蜜經、守護經からの引用も見られる。論旨の要點を佛身、教法、成佛、教益において、その淺深、優劣の差別を明している。

No. 2428 卽身成佛義（一卷）空海撰、諸經論中にみな三劫成佛を説くのに對して、眞言密教において卽身成佛を説く根據は何かを明す。初めに金剛頂經、大日經、菩提心論を引證し、次にこれらの經論の字義差別を「六大無礙常瑜伽……」なる二頌八句によつて示し、これによつて卽身成佛の義を釋す。この四字に無邊の義を含じ、一切の佛法はこの一句を出でずという。

眞言宗卽身成佛義問答一卷（異本一）卽身成佛義を立つる證文、大小二機の卽身成佛、六大能生の證文、十六生成佛の根據、六大能生佛の根據と方法、加持の義、六大と智および三密の關係、三部と三密、眞言宗所立の五智・三十七智、佛身について問答形式によつて説く。

卽身成佛義（異本二）、卽身成佛義の經論明證（異本一と異なる）、二頌八句の文意を八義に分別して説く。加持に自善根加持、如來加持、法界加持の三種あり、その一々に自他の二種ありとし、これを更に四種、十種、三種に開いて説く。

眞言宗卽身成佛義一卷（異本三）六大無礙等の二頌八句に、理具・加持・顯得の三種卽身義を對應させて釋す。次に八句のそれぞれについて問答體で疑難に答える。更に本覺曼荼羅、煩惱卽菩提、三句、四種法身等に関し、顯教經論も引用して解釋する。

卽身成佛義（異本四）三種卽身成佛義の文證、二頌八句との對應、迷悟と心佛衆生是三無差別との關係、四曼、三密、卽身の意。法然と方便力、眞言密教における心數心王、五智・無際智、本覺曼荼羅、煩惱卽菩提等、異本三とはほぼ同内容。

卽身成佛義（異本五）異本三、四と同じく、三種卽身成佛義を説き、また三、四と同じく二頌八句を唐大阿闍梨の作とする。更に、三密、三部、自他本覺佛、四種曼荼羅、涉入について詳説。異本四と同じく聖位經を引いて三十七尊を説く。

No. 2429 聲字實相義（一卷）空海撰、叙意、釋名體義、問答の三科より成る。釋名は六離合釋により、體義は引證と釋によつて明かす。大日經より「等正覺眞言……」の偈頌を引き、次に「五大皆有響……」の頌を掲げてこれを釋す。この頌の中の内外文字相を釋するうち色塵の文を釋して終結している。内容は聲字實相の密意を明かす。眞言言語哲學の精髓。

No. 2430 吽字義（一卷）空海撰、梵語の吽（𑖀）字を賀、阿、汚、麼の四字に開き、この四字を字相（淺略釋）、字義（深秘釋）の兩意より釋す。次に吽の一字として合釋するが、この一字は一切如來の眞實語であり、この吽字に一切佛法の教理行果を攝し盡すとする。眞言密

教の根源的世界を開示するもの。

No. 2431 御遺告（一卷）空海撰、承和2年（835年）3月15日の日付が入った、弘法大師空海の諸弟子等への遺告。25ヶ條にわたって、その生涯の事蹟、滅後の嗣法、諸大寺の高弟への付屬とその運営の詳細、密教の諸弟子の心得、制戒、阿闍梨の職位、兩部大法、等について記す。

No. 2432 阿字觀用心口決（一卷）實慧撰、阿（𑖦）字觀の方法、意義についての秘傳を示す。この觀に入る者は安樂を得て、世間の苦惱を離れるから解脱という。易行易修であり、しかも速疾頓悟の觀法である。續いて口傳による廣略阿字秘觀を明かす。

No. 2433 眞言付法纂要抄（一卷）康平3年（1060年）成尊撰進とある。眞言付法の八祖について記す。その中、第八祖弘法大師についての記述は重要。また、諸家に對する東密の十種殊勝を、灌頂・受學・梵文・相承・誓願・寶珠・道具・入定・法則・外度について説く。

No. 2434 辯顯密二教論懸鏡抄（六卷）は、弘法大師空海の教判論である辯顯密二教論（二教論と略稱）について、仁和寺性信法親王付法の弟子であり、平安時代院政期における秀れた佛教學者である仁和寺慈尊院の濟暹（1025—1115）が注釋を施したもので、二教論の多くの注釋書中現存最古のものであり、また最も重要にして信賴に足るものである。二教論は顯密二教を嚴格に分ち、兩者の優劣淺深を示して、眞言密教の特質を明かにしたもので、眞言宗の立教開宗上重要な位置を占めるものであるが、濟暹は、當時の佛教界論争の一つの中心問題であつた顯密二教優劣論に關して、二教論撰述の意趣を明かにし、その所説の典據を綿密にして、正しい理解を與えんが爲に本書を著したものである。

No. 2435 顯密差別問答（二卷）は、その題名のとおり顯密二教の優劣淺深について問答體で書かれたものであるが、弘法大師空海の十住心論を主要な依りどころとし、その他顯密の諸經論章疏を參酌して、極めて多方面に亘つて、十住心の中、主として法相・三論・天台・華嚴の四家大乘と秘密一乘すなわち金剛一乘とを對比し、その差別淺深を明かにしている。その論點は、顯密の一乘、佛身、地位等、顯密二教の主要な教學上の相違點を取り上げているが、それらの問題に關連する様々な事柄についても派生的に問答を展開している。

本書の撰者については、大正大藏經では嘉應元年（1169）尊雲筆寫の東寺觀智院本に依つて濟暹の撰としているが、眞言宗全書においては、建久6年（1195）筆寫高山寺の轉寫本奥書から寶生房教尋（1069—1141）の撰とし、兩者矛盾している。このため、現代の學者も、一方は濟暹の撰としてこれを扱い、一方は教尋の撰として興教大師覺鑊（1095—1143）への思想的影響を云云するなど、混亂がみられるようである。何れにしてもこの撰者の問題については、今後更に検討を要するのではないと思われる。

No. 2436 四種法身義（一卷）濟暹撰、眞言密教不共の佛身觀である自性・受用・變化・等流の四種法身説を明しており、佛身建立について二門に分別している。その第一は、一切經論

所説の三身四身の佛を法身とする義。第二は、法界宮密嚴世界中における主伴互爲自受法樂の四種佛身を眞實の四種法身とする法身觀である。これについて30餘の問答を設けて眞言密教の法身觀を説いている。

No. 2437 住心決疑抄（一卷）信證撰、空海の十住心の判教において、特に第八一道無爲心を天台宗に、第九極無自性心を華嚴宗に配當することについて論じている。すなわち、華天二宗の淺深、これら兩宗と眞言宗との相違、淺深およびそれらの所由を明確に示そうとしている。さらには、佛身觀について、顯密兩乘の相違を取りあげ、問答體に設問を立て詳細に論じている。眞言宗における比較的初期の成立とみられる本書は、教理史研究上重要な書とされている。

No. 2438 阿字義（三卷）實範撰、大日經の教體とされる阿字本不生の義について極めて詳細に検討論述している。本書では、その論據として、大日經、守護經、大日經疏、空海の即身義、聲字義、卍字義、十住心論、安然の悉曇藏等を引用し、14の項目を挙げ、それぞれ問答を設けて論じている。眞言宗における最も重要な教義である阿字義についての解説は、多くの著作が残されているが、本書は、それらの中でも極めて詳細に論じているものである。本書の論點は、阿字の名體、阿字における字相字義の淺深、阿字の諸法本不生の義等について述べ、特に、阿字字相淺深略釋の無不非の三義と字義深秘釋の有空不生の三義について有相無相の義によつて論じている。

No. 2439 阿字要略觀（一卷）實範撰、眞言宗における觀法の代表である阿字觀について論じている。實範撰の阿字義は専ら阿字の字義等について論じているのに對し、本書は、阿字觀法の實修にかかわる事を説いている。すなわち、この觀法に能詮の字觀と所詮の字義を觀ずる二種あること、さらに、能詮の字觀にも色形觀と阿聲觀の別のあること、所詮の字義觀には、一、二、三義乃至百二十義等の名義があることを述べている。また、胎藏法による阿字觀本尊とその觀法の法則、この阿字觀が、即身成佛頓悟の法門であることを論じている。

No. 2440 大經要義抄注解（一卷）撰者不詳、大經要義七卷、實範撰に對する注釋書である。ここで言う大經とは、大日經を指し、實範撰の抄では、大日經の大意、釋題、入文判義の三門を設けその要旨を説き、さらに、十住心の淺深、台密の圓珍・安然等諸師の非難を辨斥しているが、本書は、眞言宗における大日經の注書としては比較的初期の作とされる要義抄に對する末釋である。

No. 2441 祕宗教相鈔（十卷）重譽撰、撰者重譽の事蹟については餘り明らかでない。密教大辭典の説に従えば、字を理教といい朝譽とも記していることからいえば、師の名乗は「チョウヨ」と讀むのが良いか。南都東南院覺樹に三論を學び、中川實範について密法を傳えられた。後に廣衆の交を厭つて大和の光明山に入り庵を營んで淨土教を修し、此處にて寂したのであろうとして、壽及び寂年は不明である。しかし、保延・永治年間（1135—1140）を中心に活

躍せられた人であろうと推考されている。

秘宗教相鈔は題名のとおり眞言宗の教學上の特殊な問題につき、四十八條を問答の形で記述し、諸典を涉獵して要義を明らかにして自らの意見も注し疑慮を決している。

No. 2442 十住心論鈔（三卷）は保延五年（1139）に重誓によつて撰された。十住心論の要義を問答形式で説いている。第三住心より第十住心に至る八住心について記す。世間三箇住心の嬰童無畏心の段に愚童持齊心を含めて説くが、第一住心については觸れられていない。卷上に第三、四、五住心、卷中に第六住心、卷下に第七、八、九、十住心を収めて説く。

No. 2443 十住心論打聞集、撰者不詳、保延四五兩年（1138, 9）の十住心論の談義を集めたものである。保延四年三月から五年十一月にかけての談義であるが完本ではなく、纏まりに缺け、その上亂脱が多く意味の取れない所がある。

No. 2444 十住遮難抄一卷、撰者未詳、安然の眞言宗教時義の第二卷に擧げる五失即ち經釋、金剛頂經、守護經、菩提心論、衆師の説に違ふ失に對してその難を遮し、更に教時義第一卷に出される失をも遮し逆に安然の失を数える。

No. 2445 眞言教主問答抄（一卷）、教尋撰（永治元年）、眞言の教主の四種法身を論じ更に法身を能加持所加持の面より觀ず。大疏、大日經、二教論、大日經開題等の文を開いて自説を述べる。大師の釋には本地身を以て教主義となし兼ねて疏家釋に加持身を教主義となすと觀ず。最後に問答形式で四種法身を明かしている。

No. 2446 千輻輪相顯密集（一卷）、興然（保安元年～建仁三年）撰、釋迦如來の兩足に千輻輪あつて、千の光明を出し十方世界に遍照する涅槃後分の下卷の文を略引し、不空の千輻輪相讚、佛跡千輻輪眞言及び偈頌等の文を出す。顯密集というのは釋尊の千輻輪について顯教と密教の文を集めたという程の意である。兩足の圖を示し、千輻輪をはじめ卍字、利劍、商佉等吉祥標幟を畫く。諸種子を解説し、療虐病眞言、百字明などを出し、功能の廣大なるを説く。

No. 2447 貞應抄（三卷）、道範が貞應三年（1224）閏七月十三日仁和寺光臺院御室禪定二品親王道助の御下問に對して答えた書である。御下問は眞言教主三身分別事、驚覺佛三身分別事、一道極無地前地上事、四種法身横豎分別事、三種即身成佛事、即身成佛宿善事、即事而眞事、付三性事、五藏顯密分別事、付顯陀羅尼五藏分別事、一門普門分別事、自證極位說法有無事、識大顯形有無事の十一項目について述べている。これらはいずれも眞言宗において重要な問題であり、この答書によつて道範の學說を知ることが出来る。

No. 2448 諸法分別抄（一卷）賴寶記、眞言宗宗義の重要な問題とされている六大體大について論じた著作で、賴寶教學を知る上で重要な資料とされている。特に、十五項目を擧げて論じているが、その第一項では身心本元事を擧げ、眞言宗では、身心二法のうち身を元とすべきであるとする。また、四重秘釋により色心二法の勝劣を判じ、この六大をもつて諸法の本體と論じている。

No. 2449 眞言名目（一卷）賴寶述，眞言宗の教義上の重要な名目を掲げ，略説したものである。

No. 2450 開心抄（三卷）杲寶撰，眞言宗の教義及び禪密對辨に関する論文三十篇を集めており，各論篇について問答を設け詳細に論じている。本書は，杲寶の教學を知る重要な書物とされ，上巻には禪宗に関する論篇を収め，中巻には煩惱と菩提について論じ，下巻では即事而眞等眞言宗の奥義とされる教義について論じている。

No. 2451 金剛頂宗綱概（一卷）杲寶撰，金剛頂經における重要な問題としての，特に法身觀について論じている。特に，本經の教主を釋迦とするか大日如來の直説とするか，五相成身を成就する佛身について，三十七尊は自受用身か他受用身か，一切義成就菩薩の成道の會所，現證についての三重説，初會の説處等について述べている。眞言教義の骨髓に通達したとされる杲寶の金剛頂經の骨目とされる點を論じた重要な著作であるとともに，その内容の多くは，台密の圓仁・安然の所説を論破することにもなっている。

No. 2452 大日經教主本地加持分別（一卷）杲寶撰，佛教の展開史は，佛身觀の發達史と云つてよい。密教時代になつて法身大毘盧遮那如來が大日經・金剛頂經等に説かれることになり，佛身觀が最高點に達したのであつた。そして，密教とは，大日如來の自内證そのものの法門である，として従來の立場に對して優位なることの根據としたのである。空海は，辯顯密二教論という教判論において，「應化身の説法は諸宗共に許す。かの法身のごときは，色もなく像もなく言語道斷し心行處滅して，説もなく示もなし。諸經ともにこの義を説き，諸論もまたかくのごとく談ず。いまいかんがなんじ，法身の説法を談ずる。その證いづくんかある」というごとき設問をなし，顯教とは應化の説・密教とは法身の説であるという論點を明確にした。

さて，大日經所説の法身について，空海の問題意識を所依としつつ，自性法身についての再検討が日本密教史のなかで営まれた。そして，これらの検討は，自性法身の説法についてそれを本地身，あるいは加持身とする兩説，又それらの折衷説が展開したのである。

本地身説の根據となるものは，大日經疏卷一の「薄伽梵即盧遮那本地法身」であり。加持身説の根據となるものは，同書の「爾時世尊，往昔大悲願故，而作是念，若我但往如是境界，則諸有情不能以是蒙益，是故住於自在神力加持三昧」である。

これらの文を根據として，各々の自説を展開したのであるが，その結果大體古義派は本地身説を支持し，新義派は加持身説を主張したのである。

本書は，東寺學派の棟梁である杲寶（1306～1362）が，大日經の教主に関する本地身・加持身兩説の問題點を綿密に論じたもので，この種の論書としては古く，後世に大きな影響をあたえることになった。

論述の仕方は，問題點をかかげ，私云・彈云・會云の三部分によつて構成されている。そこに傍證として引用されるものは，台密の諸學匠の著作を初めとして，堀池僧正・重譽上人・般